# 「沖縄の歴史情報研究」の終了にあたって

評価担当：梅　原　　郁

今回の重点領域研究では、私は総括班に属し、評価担当の任を仰せつかった。四年間、総括班主宰の研究会を始め研究代表者会議、各研究班の研究発表会など、五十回を超える集会に出席し、この領域研究の推移を拝見させていただいた。プロジェクトが終了しようとする今日、全体を通して若干の感想を述べることは責務上不可避であろう。

当初の領域の研究目標でうたわれている、現地を中心に、戦後並々ならぬ努力で集積されてきた「沖縄の歴史資料」をコンピュータ處理によって、「琉球史料集成」として綜合的に整理すること、またそれらの中で最も重要な『歴代宝案』や『琉球家譜資料』などをデータベース化するといった基礎作業は、ほぼ計画通り実現されたと思われる。また、琉球とかかわりの深い「島津家文書」の画像データベース化も、東京大学史料編纂所の全面的な御協力によって、所期の目標に近付きつつあるといってよかろう。これら膨大な諸資料が、情報ネットワークの整備とともに、コンピュータを通して個々の研究者の机上で容易に接近できる方法も、一方で着実に進行しているとしてよい。

さて、この重点領域研究で、特に目につく点を一、二あげておきたい。第一は歴史学と情報科学が密着したことによる成果である。理工系の情報科学の最先端をゆく研究者と、人文系の学問の一つの柱である歴史学研究者が、沖縄の歴史資料を媒体として、共同で新しい構想のデータベースに挑戦し、所期以上の、かつまた将来への展望をきりひらく成果を挙げたことは特筆してよかろう。歴史学が、驚異的な進歩を遂げている情報科学の分野と一緒になって、さまざまな試行錯誤の結果、現実的な成果を生み出した。こうした共同研究は、従来殆どなかったのではあるまいか。それは単に今回の共同研究に参加した研究者たちの財産だけにとどまらず、広く、歴史学研究と情報科学・システムの繋りの、新しい橋頭堡が築かれたと言ってよい。

第二は沖縄の歴史研究における本プロジェクトの波及効果である。さまざまな理由が絡み合って、沖縄と本土の歴史研究者の相互理解は必ずしも十全だったとはいえぬ部分もある。この共同研究はそうした溝を埋めるのにかなり重要な役割を果たしたように私は考える。それはまた、琉球と中国、琉球と薩摩をはじめとした諸問題をはじめ、沖縄の歴史に対する新たな関心を本土の研究者たちにつきつけたことでもある。その意味でも、この重点領域研究は、沖縄の歴史研究に一つの時期を画するものと言って過言ではなかろう。

沖縄・琉球諸資料の広汎かつ多様なデータベース作成と平行して、研究計画では、沖縄を取り囲み、環東シナ海地域間交流史の名で三つの計画研究班が組織され、主として東洋史の研究者がそれに加わっている。ここでも琉球とかかわる中国のデータベースが少なからず作成されてはいるが、全体の研究成果としては、必ずしも満足のゆくものではないように思われる。設定された研究計画じたいは極

めて重要なものであり、今後改めてそれら問題への取組みがなされるべきであろう。同じことは公募研究にも当て嵌まる。一部を除き、多くの公募研究と、全体の研究の有機的連関が希薄であったことは遺憾である。

本研究の主要な目的であった沖縄の歴史資料の蒐集とシステム化は、所期の成果の大部分が達成されている。ただより重要な問題は、これらの成果を駆使して、細密でかつ綜合的な、従来にない本格的な沖縄・琉球の歴史研究を行なうべきことである。それはまたこのプロジェクトに参加した数多くの研究者たちに課せられた責務だともいえる。四年の期限はいちおう終了したが、本当の研究はスタートしたばかりなのである。

最後に、本研究の目標達成にむかい、文字通り超人的な努力を続けられた領域代表者をはじめ、それをサポートされたコンピュータ関係の方々、そして沖縄の研究者の方々ほか分担研究、研究協力者の各位に、深甚なる敬意を表する次第である。